図書館の文化史　高山正也　著　ちくま新書

内容説明
日本では古来さまざまな形で書籍が蓄積され、八世紀の芸亭以来、書籍の公共圏として図書館がつくられてきた。明治に導入された西洋式の図書館は、占領期にＧＨＱの改革で日本の民主化のために万人に開かれた公共図書館のシステムへと再構築されようとしていた。その推進者キーニーの改革は挫折したが、誰もが知る権利を行使できる知の公共圏としての図書館が今こそ求められる。古代から現代まで日本文化を形成してきた図書館の歴史を繙き、これからの図書館のあり方を考える。

目次
第１章　古代―書記文化の誕生から和本の成立まで
第２章　中世―武家文化における書籍公共圏
第３章　近世―出版文化の発展と教育改革
第４章　幕末・明治・大正―書籍公共圏・近代的図書館の成立
第５章　昭和・平成―紙からデジタルへの知的公共圏の発展
第６章　二一世紀の図書館を考える

著者等紹介
高山正也［タカヤママサヤ］
１９４１年生まれ。専門は図書館情報学。慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。慶應義塾大学文学部教授を経て、国立公文書館館長。現在は慶應義塾大学名誉教授。（株）ライブラリー・アカデミー塾長（本データはこの書籍が刊行された当時に掲載されていたものです）
※書籍に掲載されている著者及び編者、訳者、監修者、イラストレーターなどの紹介情報です。

内容は盛り沢山。ただ、肝心かなめの図書館の話題に関する記述は必ずしも多くない。そして、多くない上に、話題に偏りがあって、「図書館の文化史」というタイトルには相応しくない。少なくとも、帯にあるような「図書館全史」というような内容の書ではない。

第一章は「古代」、第二章は「中世」、第三章は「近世」となっているが、これら三つの章では図書館に関する話題への言及は皆無と言って良い。もちろん、これらの時代に「図書館」はない。
ただ、例えば金沢文庫のようなものはあったわけで、実際に本書でも言及はされているが、

その分量は少なく、あとは金沢文庫なら鎌倉仏教の発展など周辺の事柄についての記述が大半を占める。
どちらかと言うと、書籍に関する文化について書いたという方が適切だろう。
第四章「幕末・明治・大正」では、ようやく「近代的図書館」の成立が取り上げられるが、これも周辺的な出来事の中で図書館の成立を位置付けるといった趣であって、図書館の話題はどちらかというとおまけみたいなもの。
第五章「昭和・平成」は主に国立国会図書館について論じる。これも制度として図書館を論じたものなのかもしれないが、ごく一面を論じたに過ぎない。この物足りない議論の果てに、第六章「二一世紀の図書館を考える」とくるのだから、最後の最後でも「何だか違う」という感想しか持てない。何と言っても、第六章の冒頭で「前章までで述べてきたように、約二〇〇〇年にも及ぶ日本の図書館的文化の歴史は日本文化の形成・発展のための基盤であるとともに、日本文化の精華の集積としての図書館の発展であり、社会文化の成長・発展の軌跡でもあった。」(本書２６４ページ)なんて書かれると、そんな歴史は本書には書かれておらず、少し日本文化なるものを持ち上げ過ぎではないかと訝しく思ってしまう。

著者の現在の図書館のあり方をめぐっての強い問題意識は伝わってくる。ただ、それが強力過ぎて、何だか歪んだ主張に陥ってしまっているような気配を感じた。特に随所で、この種のテーマで参照引用するには適切とは思えないイデオロギッシュな文献が取り上げられている点が気になった。

引用させていただく。
「筆者は輝かしい高度成長期の日本を目の当たりにしているが、占領下で教育を受け、コミンテルンや毛沢東思想の信奉者に使嗾された者が多い団塊の世代が社会の第一線の指導権を握ると、日本の国力は急速に低下した。その理由は単純ではなかろうが、ひとつ言えるのは、団塊の世代の受けた教育に問題があったということである。そのうち最大のものは、日本人としての歴史認識や自己認識の歪み、アイデンティティーの欠如ではあるまいか。・・」（２９０頁より引用させていただいた)。
突っ込みどころ一杯の内容（そもそも団塊の世代は占領下で教育を受けていない）と思うが、時間の無駄なので突っ込まない。ただこういう著者の歴史認識は本文中にも出てくるので、読者は心の準備はして置かれたほうがよい。
私的感想。
〇第四章の幕末・明治・大正も前半は教育・書籍の話。後半になってやっと図書館の話となる。ここは面白かった。
〇第五章の昭和・平成はさすがに図書館の話が多くなるが、通史的記述というよりはテーマ強調の叙述で、前半は占領軍による日本人の洗脳の話でまたかと思うが、後半はキーニープ

ランと CIE 図書館の話で一気に面白くなり、福田なをみ氏の話、ジャパン・ライブラリー・スクールの話と続く。この後半部分はたいへん勉強になった。
〇第六章は２１世紀の図書館について、いろいろ意見を述べられるのは構わないが、乱暴な言葉がそのまま載っているのは、当事者でなくとも、ちょっと辛い。図書館の「無料貸本屋化」程度はともかく、「「今後の図書館は人的資源に於て、廃物活用場となる」というのが現実となってしまった」、「図書館業務は人間的に廃物でも執行可能な業務であると平然と公言していることになる」など。

私的結論
〇好きな本ではないが、キーニープランと CIE 図書館の部分は勉強になった。
〇図書館にはもう数年以上行っていなかったが、最近、どうやっても入手できない本、
を他の図書館から取り寄せてもらうために行ってみた。
図書館員の方は何も聞かずに黙々と作業して手続きしてくれ、半月ほどして本が届いた。うれしかった。たいへん感謝している。
どの本も入手困難または入手不能の状態が続いている（正確に言うと、国会図書館デジタルで読めるものもある）。
日本は本当に文化国家なのだろうか。文化の旗手筑摩書房はぜひちくま**文庫化**してほしい。

2022-11-4

https://share.icloud.com/photos/0b1BsF2kf5aMaoRWvkoVPbelA